

ヨーロッパみてある記

—西洋きのご事情—
(その8)

瀧澤 南海雄

ロッカーの使用法に迷う

12月2日

8時朝食。

今日はベンローという町まで列車で行き、1泊することになっている。というのは、明日訪問するキノコ研究所とキノコ栽培者訓練センターがあるホルスト村にはホテルがないので、少し離れたベンローに宿をとったからだ。

チェックアウトして中央駅へ移動したが、駅のロッカーに手荷物を収めるのに手間取ってしまった。マイコン方式になっていて、操作パネルにコインを入れ、空いているロッカーの番号を打ち込むとそのロッカーが開き、手荷物を収めて扉を閉めるとカードが出てきて、そのカードが鍵の替わりになる、と説明文には書いてある。しかし、コインを入れてロッカー番号を打ち込むのだが、扉は一向に開いてくれない。何回やり直しても同じである。そのうち見兼ねたのか、土地っ子らしき人が近付いてきて、ロッカーの扉の一部を無言で指さした。よく見ると、扉には矢印が描いてあり、その矢印の方向は、我々がいじり回していたパネルの左隣りのパネルをさしていた。すなわち、我々は開けたいロッカーとは全く関係のないパネルを操作していたのである（一つのパネルが支配しているロッカーは12個で、Aのパネルは1～12番までのパネルを支配し、Bのパネルは13～24番を支配しているのに、我々はAのパネルに対して15番の扉を開けると命じていたのだ）。またまた我々がお上りさんであることを衆目に晒してしまった。お恥ずかしい、とあたりを見回した

ら、パネルの前で考え込んでいる人が他にも結構見受けられた。

運河の遊覧を楽しむ

列車の発車時刻まで時間があつたので、運河の遊覧を楽しむことにした。およそ1時間の船旅である。入り組んだ運河に面する建物は隙間無く立ち並び、建物と建物の間には蟻の入り込む余地も無いほどである。これを建設する時には、一体どうやったのか不思議に思える。木造と違って、石造りの建物だからこの様に密着して建てられるのだろうが、それにしても、建物の前後にしか窓が取れないのだから、光や風の取り入れの問題はどうなっているのか気になった。また、どの建物も最上階の軒下には滑車が付いていて、大きな物はこの滑車に通したロープに吊し、窓から出し入れする、とガイドが説明した。

遊覧船は4か国語で観光案内をしながら、鏡のような運河を滑るように進む。途中、ゴッホの描くような跳ね橋や、橋の下から向こうの橋が、そ



写真1 運河に沿った街並み

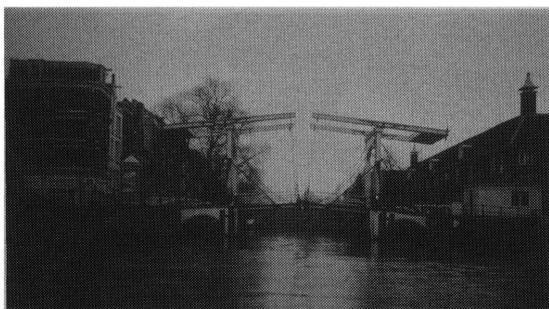


写真2 跳ね橋

のまた下からさらに向こうの橋が、2重、3重に重なって見える所もあり、結構楽しめた。

教会のミサからオーディオを考える

船から降りて、駅の近くの教会 (Saint Nicholas community) へ入る。日曜日のミサの途中だったが、快く招き入れてくれた。

ミサは一定のシナリオに沿って進行しているようであった。合唱隊が賛美歌をパイプオルガンの伴奏で歌い、神父が聖書を基に説教をする。そして、信者代表らしき若い女性が聖書の一部を朗読し、その後、全員で賛美歌を歌う。これが何回か繰り返されるのだが、神父の説教と信者代表による聖書の朗読とが非常に音楽的で、謡い上げる、という表現がピッタリである。いってみれば、ミュージカルっぽいミサなのだ。そして、これを支えるパイプオルガンの音が大変に優れていて、柔らかく、深く、非常に心地好い響きであった。

アムステルダムに限らず、今回訪問したいずれの地でも、人々はごく普通の生活の中でパイプオルガンの音に接していた。これは日本の現状と比べて大変に羨ましい環境であると思った。パイプオルガンは、オーケストラに匹敵する音域、音量、表現力、(打楽器の表現だけは欠けるが) を持つ楽器である。この本物の楽器が奏でる本物の音楽に、ヨーロッパの多くの人々は、幼い時から最低週一回、日曜日ごとに出会っているのだ。さらに、教会ではいろいろな演奏会が頻繁に開催されていて、人々は少ない負担でそれらを楽しむことができる。このことが、人々の音楽性や音楽を聞く耳を育てることに、どれだけ役立っているこ

とだろうか。

余談ではあるが、私の趣味の一つはオーディオである。昔から日本人が作るアンプやスピーカーは、特性はよいが音楽性に欠ける、といわれてきた。再生する音は歪みが少なく美しいのだが、聞こえてくる音楽がつまらないというのだ。

これは、日本人がアンプやスピーカーを開発する場合に、入力された単純な波形の電気信号を正確に再生できることを、価値判断の基準にして来たためである。つまり、音楽という複雑な波形の積み重なりがどう再生されるか、ということよりも、サインカーブがどう再生されるか、に力点を置いて来たのである。

何故そうなるかという点、日本では、本物の西洋音楽に日常的に接する機会が少なかったため、再生される音楽を聞いて装置の善し悪しを判断する耳を持つ技術者が、殆ど育たなかったからである。そこで測定器に頼ってしまうことになる。要は音楽ではなく昔学をしてきたのだ。

一方、ヨーロッパで開発された装置は、特性(歪みの少なさ、周波数レンジの広さ、ダイナミックレンジの広さなど)こそ日本のものより劣るものの、大変生き生きとした音楽的な再生をするものが多いといわれてきた。この日欧の違いは西洋音楽に対する歴史的・伝統的な差から生じる、とされているが、今回のヨーロッパ旅行で、「こりゃ - , とってもかなわないや」と思い知らされたのは、教会の存在であった。

つまり、ヨーロッパの技術者は、教会で洗礼を受けた時から、少なくとも週一回はパイプオルガンの音に親しんで育つので、楽器の音や音楽を聞き分ける耳が自然に身につけてしまう。そのため、自分の耳を頼りに、自分が納得できる音楽が聞こえてくるように、再生装置を調整することができる。その結果、音楽が楽しめる装置が出来上がる、という訳だ。

また、音楽の基礎(ベース)を支える低音に対する感覚において、日本人は決定的に劣っているように、私は思う。日本古来の楽器で低音を出すものは大太鼓だけであるが、30ヘルツの音(パイ

ポオルガンは16ヘルツまで出せる)を出す太鼓など多分無いだろう。また、仮にあったとしても、その太鼓の音に日常的に出会う機会など皆無である。こういう生活の中から、低音を正確に判断できる人間が自然に育ってくる筈がない。

反面、高音を出す和楽器は笙、三味線、鼓、拍子木、風鈴など数多い。それあらぬか、日本人は高い周波数の音には非常に敏感である。虫や鳥の鳴き声でも、高く澄んだ鈴虫や鶯の声を特に愛するめは、そのためであろう。

この事は当然日本人が造る再生装置にも影響し、日本製の装置は、高音の歪みが少ない美しい音を再生するが、低音の力が足りないものが多い。

この様に、「人々の日常生活での音楽体験の違いが、それぞれが作り出す音楽再生装置の質に重大な影響を及ぼす」というのが、今回の旅行を通じて私が得た確信である。

本物のオランダ料理のまずさに思う

さて、ミサは進行して行き、最後に献金の箱が会場を回り終わると(私も500円相当を拝観料替わりに献金した)、信者たちは椅子から立上がり、自分の前後左右の人々と感謝の言葉を交わしながら握手を始めた。私は山川さんと共に最後列にいたので、前の椅子に掛けていたご婦人から握手を求められた。握手をしながら相手の顔を見ると、ミサによって高揚した心が、ピンク色に染まった満面に現れていて、本当に幸せそうであった。

教会を出た後、キノコを探して街を歩き回る。そのうち、一軒のレストランの前を通りかかると、入り口の看板に、「本物のオランダ食」と英語で書いてあるのを見つけた。丁度昼時でもあったので、中に入ってビールと共に注文。荒井注に似た感じの親父さんは、厨房で鼻歌交じりに料理を始めた。壁には店の記事が載った新聞の切抜きや、親父さんが女性客とダンスに興じている風景などを写した写真が、ところ狭しと貼られている。どうやら、この店は夜の居酒屋が本業で、仕切っているのはかなりな名物親父らしかった。

出てきた料理は、味をつけたマッシュポテトの



写真3 本物のオランダ食

上に、ソースを掛けた野菜炒め、トマトの薄切り、太いフランクフルトソーセージなどを載せたもので、お世辞にも旨いとはいえない代物だった。そして、突然ではあるが、イギリスにしる、オランダにしる、“植民地政策を押し進めて来た国には旨いものが無い”という通説は、納得できるものだと思った。それらの国の人々は、もともと旨い食べ物を知らないから、遠い見知らぬ土地に向き、初めて出会う食べ物や粗末な食べ物でも平気で食べ、めげずに働くことができたのだ、という説には強力な説得力がある。

列車を降り損ねてバッテリーカーに乗る

13時20分発の列車に乗る。途中乗り換えがあるので緊張していた。というのは、ヨーロッパの列車は車内放送が無く、駅でも駅名の放送が無いので、列車が止まった駅が何処なのかは、駅名の案内板を見ない限り分からないからだ。しかも駅名の案内板を見ても、日本のように次の駅名は書いてないので、次に何処に止まるかは、いちいち時刻表で確かめなければならない。だから、乗り継ぎ駅を乗り過ごさないように緊張していなければならないのだ。

首尾よく乗り換えて、目的のベンロー駅は終点だからと安心し、のんびりとしていた。山川さんは眠っている。そのうち、とある駅で列車は停車し、また走りだした。何気なく窓から外を眺めていた私は、あることに気が付いて、慌てた。何と、駅名の案内板にVenloと書いてあるではないか。ベンローはドイツとの国境にある町である。



写真4 乗せてもらったバッテリーカー

このまま走れば、列車はドイツ国内に入ってしまう。

「大変だ、ベンローが終点ではなかったようだ。乗る列車を間違えたらしい。」大急ぎで山川さんを起こし、事態を説明するが、もう如何ともしがたい状況である。列車任せにするしかない、と臍を固めた。ところが、列車は1km近く走ると、操車場らしき所へ入って止まった。ドアを開けて様子を窺っていると、隣に止まっていた列車の窓から若い男が顔を出して、「どうしたんですか」と聞く。「降り損なっただですよ」と答えると、「この列車はここで掃除をして、1時間後にアムステルダムへ折り返えすんです」と言い、次いで「駅まで送りますから、列車を降りて下さい」と言う。そこで、列車を降りたところ、道路上に駅との往復に使っているらしいバッテリー駆動の貨物車があり、それに乗せてもらって、ガタゴトと駅まで戻った。重い手荷物を持っていることでもあり、もし歩いて戻ったら大汗をかくところだった。列車の清掃を中断して我々を送ってくれた駅員さんの好意が心底嬉しく、お礼を述べて、記念に写真を撮った。それにしても、バッテリーカーに乗る幸運に恵まれたのは、ウッカリミスのお陰。ミスが幸運に繋がるとは、我々は神の祝福を受けているらしい。これも、500円の献金の御利益か。アーメン！

ホテルの裏庭で天然のスギタケを採取する

ベンロー駅の窓口で聞いたところ、係の女性が「ホテルは遠いので、タクシーで行った方がよい」



写真5 薄暗がりで見つけたスギタケ

とオランダ語を用いたテレパシーでいうので、タクシーに乗ると、8.8ギルダーで山の中のホテルへ着いた。

チェックインし、夕食前の運動がてらに散歩に出る。裏庭に大きな池があり、他の後ろは森になっていて、散歩道が縦横に走っている。薄暗くなった散歩道を歩いていると、池のほとりに立っている木の根元に、何やら塊があるのを見付けた。近付いてよくよく見ると、スギタケであった。ヨーロッパで見る本格的な野生キノコだ。「山川さん。遂に見付けたぞ - 」と叫ぶと、彼は飛んできて覗き込み、「本当だ。遂にやりましたね - 」と感じ入っている。日本に持ち帰る訳にはいかないもので、そのままにしようかとも思ったのだが、この地方の人々が食べているかどうかを知りたかったので、採取してホテルへ持ち帰った。フロントマンに、「このキノコを知っていますか？」と尋ねたところ、「知りません」という。そこで、「日本ではこのキノコを食べるんだよ」と教えたところ、「本当ですか？こんなものを食べて病気になるんじゃないんですか？」と驚いていた。

街のレストランでカモとウサギを食べる

夕食をとりにホテルのレストランへ行こうとしたら、フロントマンが、「今日はレストランを閉鎖しています。街のレストランを紹介しますので、タクシーで行って下さい」という。ときおり仮装をした人々が行き来しているところを見ると、レストランを借り切ったパーティーがあるらしい。仕方なくタクシーを呼んでもらい、街へ出

た。タクシーの窓越しに見る町並みや道路は、とても美しく、しかも清潔だった。

こじんまりとしたレストランへ着き、女主人にお薦め料理を聞くと、カモが良いという。そこで、カモを1品と、メニューからウサギ料理を1品選んだ。酒は、まず黒ビールを一杯、その後ブルゴーニュ産の白ワインを1本。黒ビール(小さな瓶で出てきた)は妙に甘ったるい味だったが、ワインは辛口で旨かった。

料理は、というと、カモのローストはまあまあ味の味だったが、ウサギは香りの強いソースに塗れていて、ウサギかカメか、とんと分からぬ代物であった。なるほど、女主人がウサギを薦めなかった訳だ!?

帰りのタクシーは、8人乗りの大型車が来て料金を心配したが、街へ出た時と同じ料金でホテルに着いた。どうやら日本とは料金体系が違って、お客さん本位になっているらしい。それに反して、ホテルの都合でレストランを閉鎖しておきながら、街のレストランへのタクシー代を客持ちにさせるなど、ホテルの方はお客さん本位の料金体系になっていないらしい。全くもって理不尽である。

風呂、洗濯、11時に就寝。

またまた失敗、目指す駅を列車は素通り

12月3日

7時15分起床。朝食後、タクシーで駅へ。8時31分発の列車がある、と言うので乗ると、いい調子で突っ走り、あれよあれよ言う間に一つ目の駅を素通りしてしまった。二つ目の駅(ホルスト)の手前で車掌が検札に来たので、「ホルストに止まるか」と聞くと、「止まらない。ホルストの三つ先のヘルモンドで降り、9時08分の列車に乗り換えて戻るしかない」という。急行列車に乗ってしまったのだ。オーマイゴッド! 昨日の献金の御利益は一晩で消えてしまったのか。

しばらく走った末にヘルモンドで降り、下り線に移動して列車を待つ。すると、珍しいことに構内放送があって、「ベンロー、20分、??!」

と言っているらしい。また暫くすると、「ベンロー、10分、??!」と聞こえる。どうやら列車の遅れを放送しているらしい。「ベンロー行きの列車は、ただ今10分遅れで運行しています」と言っているらしいのだ。結局9時20分に列車が到着して、乗り込むことができた。

公衆電話で一汗かく

ホルストへは9時45分に着いた。エライ田舎だ。駅のそばにはほとんど建物が無い。駅の窓口を覗くと、駅員も一人しかいない。キノコ研究所への道を尋ねたが、英語が通じない。彼が指さすほうを見ると、タクシー会社の電話番号を書いた貼紙があり、また別の方向を指さすので見ると、公衆電話があった。

まずタクシー会社に電話し、次いでキノコ研究所に電話する。そのとき失敗を一つ。タクシー会社には局番無しでかかった(駅の貼紙には局番が書いてなかった)ので、キノコ研究所も局番を外してダイヤルを回した。すると、民家に繋がってしまったのだ。初めて出た旦那さんは英語が分からず、代わって出た奥さんが、キノコ研究所へは局番を回す必要があることを教えてくれた。

あらためてダイヤルすると、研究所が出た。しかし、困ったことに、今日会うことになっている研究者の名前(Gerritze博士)を言っても通じないのだ。私の発音がまるっきり違うらしい。そこで、名前をスペルを言って了解してもらおう。しかし、彼は外出していて留守だという。そこで、彼からのFAXに載っていた別の研究者の名前(スプラーツマ博士)を言うと、これは一発で了解して電話を繋いでくれた。

スプラーツマ博士は「駅まで迎えに行きます」と言うので、タクシーを予約してあることを伝え、「タクシーに乗れば、15分で研究所に着きますよ」と言って電話を切った。ところがタクシーの運転手は研究所が何処にあるかを知らず、途中2回も道を尋ねて、やっと研究所に辿り着いた。

若い(30才前後か)スプラーツマ博士は玄関で待っていてくれ、Gerritze博士は会議中なので



写真6 牛乳瓶で培養されているシャンピニオンの種菌
自分が案内する、と招き入れてくださった。彼の話の概要は次のとおりである。

キノコ研究所

研究所には基礎研究部門の建物が2棟あり、一つは15年前に建設され、もう一つは3年前に種菌の売上げを用いて建てられた。その他に応用試験棟として16の栽培室と、コンポスト（シャンピニオンを栽培するための堆肥）の製造プラントを所有している。コンポストは開放系で製造するもの（温湿度を自然に任せて発酵させる）と閉鎖系で製造するもの（温湿度などを人工的に調節しながら発酵させる）があり、両方を栽培試験に用いている。

現在の研究対象はシャンピニオンだけであるが、以前はヒラタケ、シイタケ、コムラサキシメジも対象としていた。これらのキノコを研究対象から外した理由は、種菌の需要が無いこと、ヒラタケ、シイタケは、トリコデルマ（キノコの菌糸を殺して食べてしまう黴の仲間）の被害が大きくて栽培が安定しない上に、市場での価格も安定しないこと、コムラサキシメジは収量が少ないので企業化が不可能と判断したこと、などによる。

研究所内を見せてもらったが、基礎研究棟では、原菌の保存に用いる超低温菌株保存装置（液体窒素を用いて冷凍保存する装置）や、牛乳瓶に詰めた穀物（マイロ）で培養されているシャンピニオンの種菌が物珍しかった。また、応用試験棟では、シャンピニオンの栽培を行っており、丁
1992年11月号



写真7 コンテナに詰められるコンポスト

度、試験用の堆肥をプラスチック製の容器に一定重量ずつ詰め込んでいるところを見ることができた。実際の栽培では、小さな容器は使わず、長いベッドを機械的に作るのだが、研究所では、小さな単位での試験を行うことが多いようだ。

施設を見学している間に、Gerritze博士の体があいた。そこで博士と合流して、こちらの資料などを材料にディスカッションした。話の中で、お互いに品種の交換をすることが可能か、と尋ねたところ、キノコ研究所はシャンピニオン以外に独自の品種を持っていないので、交換には応じられないという。これまでも研究に必要な種菌は、そのつど種菌メーカーから購入して用いてきたのだそうだ。

レストランでダッチ式軽食を食べる

昼になったので、研究所を辞去した。スプラーツマ博士は、ホンダのシビックで我々をキノコ栽培者訓練センターへ送ってくれたのだが、途中レストランへ寄って昼食をとった。メニューにダッチ式パンケーキとあるので注文しようとする、スプラーツマ博士が、「貴方がたには量が多すぎて持て余すでしょうから、他の物をとったほうがよいと思います。私はパンケーキをとりますけど」という。そこで、ダッチ式サンドイッチに変更したが、出てきた料理を見ると、どっちもどっちの量である。どうやらオランダ人は大食漢揃いのようだ。結局、3人とも食べ切れずに、少しずつ残してしまった。

（林産試験場 微生物利用科）